

広報委員 の一言



2025年には戦後のベビーブームで誕生した団塊の世代が後期高齢者となり、我が国は本格的な超高齢社会を迎えることになる。また2040年にはこの世代が90歳代になるので高齢者人口が減少に向かうとされている。しかし若年者人口も減少するので、2060年頃までは高齢化率は40%前後で推移するといわれている。

医療と介護と福祉が連携してこうした状況に対応していくことになり、住み慣れた自宅で末永く暮らせることを目指して、地域包括ケアなどのサービスが社会に浸透しつつあるように見える。しかし、フレイルの状態になった高齢者が無理を重ねながら自宅で暮らし続けることによって、転倒による骨折や孤独死を招く場合もあるようにも思える。

私自身も団塊の世代に属しているので、こうした問題は他人事ではない。開業医として30年余り経過したが、ホームページを通じた宣伝が効を奏して肛門外科の患者さんが一定数来院し、日帰り手術も月に2、3件行っているが、徐々に医院の仕事量を減らしていかなければならないと考えている。勤務医の先生方も定年後は健診機関や高齢者施設で80～85歳頃までお仕事されているようである。医師不足の折でもあり、健康な間はしっ

かりと働きたいものである。

ところで、医師としての仕事に終止符を打った後の暮らし方についても今からよく考えておきたいと思う。社会とのつながりを失って家に閉じこもったままになったのでは健康に良くないし、家族から迷惑がられることにもなりかねない。他の会員の先生方とは違ってこれといった趣味の持ち合わせもないので、家の中の不要品を処分したり、家事の手伝いでもしながら日々を過ごすしかないような気がしないでもない。

一般論になってしまうが、生活の変化を嫌って自宅で過ごすことに拘りすぎると、家事労働による負担が重くのしかかって、かえって健康寿命を短くする可能性もあるので、自立者を対象にした老人ホームを上手に利用して、社会的活動や外出などをほぼ自由にできる時期に、自らの経済力を使いながら自分なりの人生を楽しめれば理想的ではないだろうか。

映画ではラストシーンが素晴らしいと感動の記憶がずっと残るものであるが、晩年を充実したものにするのは、単なる自己満足ではなくこれまでの自分の人生を支えてくれた人々に対する、ささやかな恩返しにもなるのではないかと考えている。

(勝井 豊 記)

広報委員会委員：佐藤雄一郎・橋立英樹・勝井豊・高塚尚和・磯部賢論・恩田晃・平塚素子・永井雅昭

新潟県医師会報・第900号〔令和7年3月〕

発行所 〒951-8581 新潟市中央区医学町通2-13 新潟県医師会

TEL：025-223-6381 FAX：025-224-6103

ホームページ：<http://www.niigata.med.or.jp> メール：kaihou@niigata.med.or.jp

印刷所 〒950-8724 新潟市中央区和合町2-4-18 株式会社 DI Palette
